研究論文

子育て支援における保育士養成校の役割

― 本学幼児教育学科における実践を通して ―

梶　浦　真由美・清　水　貴　子

The Role of a Training School for Preschool Teachers in Providing Child Care Support for Families

― Practice in the Preschool Education Department ―

KAJIURA Mayumi and SHIMIZU Takako

Ⅰ．はじめに

児童福祉法の一部改正する法律が，2001年（平成13年）公布され，保育士資格の法定化が図られた。保育士業務についても同法第18条の４で「保育士の名称を用いて，専門的知識及び技術をもって，児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うこと」と規定された。さらに2002年（平成14年）度には保育士養成課程も改正「家族援助論」が創設され，教授内容として「子育て支援」が明確化された。

この教科目を通して「保育」という行為が，子どもに対する保育と保護者に対する保育指導になったことを，学生に説明している。しかし，学生の多くが保育系大学志望動機として「子どもが好き」という理由をあげ，保育者といえば当然子どもとの関わりが，仕事の大半と思って進学してくるものが多い中で，とまどいを見せる学生も少なからずいるのが現状である。当教科目の担当教員として，今後学生が職場でどのような力を発揮していってくれるのか，心配と期待は大きい。

ところで，上述したように保育対象が，子どもから子どもも含めた家族へと変化したことは，言い換えれば「子育て支援」が保育士の重要な役割として位置付けられ，それを遂行するための十分な資質・能力が要求されるようになってきているといえる[1)]。

「子育て支援」は，1980年代後半頃から徐々に関心を集めてきた領域で，その取り組みが本格的になってきたのは，1990年（平成２年）の合計特殊出生率が1.57を切り，少子化の認識が

一般化したことによる。それまで一般家庭の子育ては「私事」的なものとの認識が強かったが，子育てを取り巻く環境の変化などもあり，子育てを社会が支えていく必要性が広く唱えられた。行政においても育児，保育に関する事業推進がはかられ，特に「子育て支援関連事業」が，1993年（平成５年）度より予算化され積極的に推し進められていくことになったのである。

それでは，保育士養成校（以後養成校）としては，子育て支援としてどのような役割を担う必要があるのだろうか。本稿では，まず，わが国の子育て支援政策について整理・確認する。ついで，2004年度本学幼児教育学科で取り組んだ子育て支援の実践について検討し，養成校における子育て支援の役割を明らかにしたい。

Ⅱ．子育て支援政策の概要

毎年発表されるわが国の合計特殊出生率は，2003年（平成15年）過去最低の1.29で，1975年（昭和50年）の2.00を下回ってからここ30年近く低下傾向にある。2004年（平成16年）内閣府により実施された「少子化対策に関する特別世論調査」の結果をみると，行政が行う少子化対策に関して，期待する政策として「仕事と家庭の両立支援と働き方の見直しの促進」や「子育てにおける経済的負担の軽減」が過半数を超え高かったが，「地域における子育て支援」をあげたものも３割いた。また，子育てにおいて地域社会における住民同士の助け合いとして，「子育てに関する悩みを気軽に相談できる活動」（52.3%），「子育てをする親同士で話ができる仲間作りの活動」（41.3%），「子育てに関連した情報を簡単に入手しあえる活動」（31.8%）などの活動を望むものが多いことがわかった。

このように，「子育て支援」事業に関する国民の期待は大きく，利用者のニーズに応えるような支援内容を考えていく必要があることは言うまでもない。ところで，この10年間でわが国の子育て支援政策は，継続的出生率低下に対応する形で著しく変化している。そこで，まず，わが国の子育て支援政策について概要を整理し，次いで本学科所在地のある札幌市の子育て支援の取り組み状況についてみていくことにしたい。

⑴　わが国の子育て支援政策

前述したように，わが国において子育て支援が本格的に取り組まれるようになったのは，1990年（平成２年）のいわゆる「1.57ショック」を契機として，少子化対策を求める世論が高まったことによる。1970年代，社会の高齢化の問題に注目があり，様々な高齢化対策が図られてきた。しかし，高齢化は少子化とコインの裏表の関係にあるとの気づきのもと，ようやく1993年平成５年版厚生白書でも，「未来をひらくこどもたちのために」と題し，子育ての社会的支援を考えるを副題としてあげ，高齢化対策と並ぶ重要な課題として子育て支援事業に積極的に取り組む姿勢が打ち出された。

1994年（平成６年）12月「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」が当時の文部・厚生・労働・建設省４大臣の合意により策定され，わが国の子育て支援対策は本格的にスタートした。このエンゼルプランの一環として策定されたのが「緊急保育対策等５ヵ年事業」(1994～1999年度)である。エンゼルプランによって示された「仕事と家庭の両立支援」と「子育て負担の軽減」を具体化するために，保育サービスの拡充に緊急に取り組む必要があるとして発表され，プランをより具体的にするために数値目標が設定された。具体的項目としては，①低年齢児（０～２歳）の受け入れ拡充　②延長保育（通常の11時間を越える保育）の充実　③地域子育て支援センター事業の拡充　④乳幼児健康支援一時預かり（病

気回復期）の拡充　⑤放課後児童健全育成事業の充実　⑥一時保育（育児疲れ解消，パート就労対応等）の充実　⑦多機能保育所の整備の７項目である。

当初目標を大きく下回った項目もあり（上記③，④，⑥の項目等）これを引き継ぐ形で1999年（平成11年）12月「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について（新エンゼルプラン）」が，当時の大蔵，文部，厚生，労働，建設，自治省６大臣の合意により策定され，2000年（平成12年）度を初年度として2004年（平成16年）度までに重点的に推進する少子化対策の具体的実施計画が発表された。新エンゼルプランの主な内容は，①保育サービス等子育て支援サービスの充実　②仕事と子育て両立のための雇用環境の整備　③働き方についての固定的な性別役割分業や職場優先の企業風土の是正　④母子保健医療体制の整備　⑤地域で子どもを育てる教育環境の整備　⑥子どもたちがのびのび育つ教育環境の実現　⑦教育にともなう経済的負担の軽減　⑧住いづくりやまちづくりによる子育ての支援などが盛り込まれている。

このように，当初の子育て支援政策は，子育てと仕事の両立支援など子どもを生み育てやすい環境の整備に重点がおかれ，主に保育サービス拡充・充実に力が注がれていたが，新エンゼルプランではかなり幅広い内容にまで踏み込み計画されたことがわかる。しかし，未だ深刻な少子化をくいとめる決め手にはなっておらず，依然出生率は低下し続けている。2002年（平成14年）１月発表された「日本の将来推計人口」によると，従来少子化の直接的要因とされた晩婚化や未婚化に加えて，「夫婦の出生力そのものの低下」が指摘され，現状のままでは今後一層少子化が進行すると予想された。そこで，国としても少子化に歯止めをかけるために，さらに，2003年（平成15年）「次世代育成支援対策推進法」（2005年から10年間の時限立法）を策定し，全国の市町村に「行動計画」の策定を義務づけている。ここでは，従来の子育てと仕事の両立支援に加えて，①男性を含めた働き方の見直し　②地域における子育て支援　③社会保障における次世代支援　④子どもの社会性の向上や自立の促進　の４つの柱に沿った取組みを推進している。

⑵　札幌市における子育て支援の取り組み

以上のような国における政策を受けて，地方自治体としては具体的にどのような取り組みがなされているのであろうか。

1995年６月に「緊急保育対策等５ヵ年事業」に呼応する形で，地域の実情に応じた地方計画を策定することになり発表されたのが，いわゆる地方版エンゼルプランといわれる「児童育成計画」で，地方公共団体が取り組むべき目標を示した計画である。政府が各自治体に通知した児童育成計画策定指針では，「子どもの視点」「利用者の視点」「地域の視点」等６つの基本的視点が掲げられている。特に前二者の視点は重要で，「子育て支援」は「子ども自身の育ち」の視点を重視しながら行う「子育て・子育ち・親育ち」であり，そのことにより，親の都合を優先した支援に偏りがちになるのを防ぎ，「子どもの育ちにとって何が望ましいか」という視点に常に留意することが期待されていることである。また，「利用者の視点」では，住民参加や実態調査に基づく利用者の視点を取り入れる手法を積極的にとることを望ましいとしている[2)]。国の子育て支援政策が，少子化対策という観点が底流に貫かれていることを考慮すると，現代の子どもや子育て家庭を取り巻く実態を念頭においた地方の計画は評価できるものといえよう。

それでは，このような地方版エンゼルプランを受けて札幌市では，どのような子育て支援が行われているのであろうか[3)]。札幌市は，全国

的にも合計特殊出生率が低く，2003年1.02で，全国の1.29を大きく下回っており，特に少子化問題は重要課題の一つとして位置付けている。1996年（平成８年）７月「札幌市子育て支援計画」を策定し，地域社会・企業・行政が子どもの成長と子育てを支援することにより，誰もが安心して子どもを生み育てることが出来る社会－子育て支援都市“さっぽろ”－の実現をめざした。これを受け，1997年（平成９年）度より，子育て家庭に対する直接の支援と地域で子育てを支える環境作りを柱とした「地域子育て支援事業」を開始し，子育てボランティアの育成・活動支援のほか，子育て支援ネットワークづくりを進めている。

また，2003年（平成15年）７月児童福祉法の改正があり，従来の「要保護及び保育に欠ける児童対策」中心から「すべての子育て家庭への支援」に改められた。これを受けて，「札幌市子育て支援計画」の改定にあたり，2004年（平成16年）10月「次世代育成支援対策推進行動計画」－さっぽろ子ども未来プラン－を策定した。地域・区・全市の三層構造による子育て支援の展開を定め，地域での子育て支援（小学校区に１か所の子育てサロン），各区に子育て支援センターの設置，そして全市単位として札幌市子育て支援総合センターを設置し，全市的な子育て支援の展開を図ることにしている。

札幌市の具体的取り組みとしては，地域で安心して子育てができるように，０歳から就学前の子どもを育てている家庭に対して前述したように全市をはじめ区や地域レベルで様々な支援が行われている[4)]。まず，区レベルで取り組まれている支援の内容としては，親子が自由に集い交流できる場を提供する子育ての仲間作りをねらいとした「子育てサロン」がある。従来，仲良し子ども館は屋外（公園）で小学校就学前の子どもを対象に行っていた。しかし，４歳以上の子どもは幼稚園や保育園に通園するため，参加する子どもは低年齢になってきた。そのため，子育てサロンを仲良し子ども館の後事業として1997年（平成９年）から屋内で開始し８年目になる。2004年（平成16年）度子育てサロン会場は市内99会場で南区では計９ヶ所，月曜から金曜まで各児童会館で１日２会場（但し木曜日は１会場）において午前中定期的に開催し，毎回１会場で約20組程の参加がある。南区の当課では，保育士が１会場につき約３名で（９人の保育士が交代）担当し，民生委員や児童委員，子育てボランティア（登録）も参加している。保育士が会場に遊具など持参し，環境設定を行い，保育士はあくまで場を提供し，遊びの紹介やサークル作りのアドバイス，子育ての相談などを行い，基本的に，子どもを自由に行動させる補助業務を行っている。この他にも，育児に必要な情報提供や子育てに関わる人のための講座を開催している。また，保健センターの中に設置した子育て情報室では，各種資料や育児書，絵本，ビデオ等を揃え，子育ての相談にも応じている。

全市レベルでは，2004年（平成16年）４月，小学校，保育園，ミニ児童会館が入った子ども関連の複合施設「札幌市子育て支援総合センター」がオープンした。年末，年始を除いて設置する常設のサロンをはじめとして情報提供等全市的な子育て支援ネットワークの中核的機能を果たしている。また，地域の子育て支援センター事業として，市内７ヶ所の公立保育所で，地域の親子が気軽に集い，施設遊具を使って遊んだり，入所児童との交流や育児相談，子育て情報交換の場として保育所の開放を行っている。この他，地域主体の子育てサロンも現在81ヶ所あり，活動している。

以上のように，札幌市においては，地域の実情にあわせた子育て支援策が積極的に展開されている。

Ⅲ．本学幼児教育学科における子育て支援の取り組み

それでは，養成校として「子育て支援」を念頭に置いた時何ができるのか。本学科では，先にみた札幌市で展開されている「子育てサロン」等を参考にし，併設されている附属幼稚園を会場に開催し，そこに学生が正規の授業の中で関われるような形態をとった。その結果，どのような効果が得られたかについて，実習後課した学生のレポートの記述から分析し，その役割を明らかにすることとした。なお，養成校における子育て支援を念頭に置いた時，養成の対象としては学生の他に現職保育者や地域社会の人々等が考えられるが，本稿では学生を対象にその役割を検討することにする。

⑴　事業計画

本学科では，大学が，地域の生涯学習センターとしての機能を広く開放して，地域住民へのサービス活動を行うことが強く要請されていることを踏まえ，附属幼稚園との一体のもとに子育て相談，母親教育等に応じ，子どもの健全な育成に資することを目的として，1993年（平成３年）「子育て相談研究センター」を設置し活動していた[5)]。一時諸般の事情から学科としては，活動を休止していたが，昨年新たな取り組みとして公開講座も含む形で子育て支援事業を再開するに至った。当初は，学科による公開講座の開講が主たる目的であったが，余程その内容や講師に魅力がないと参加者が集まらないのではないかという懸念があった。そこで，子育て支援と組み合わせ，毎回本学科１年生（15名前後）が実習という形で参加することにし，養成校としての特色を出し取り組むこととした。学生は，実習後レポートを提出し，「保育実習の研究」15回分の授業（清水担当）のうち２回分に振替た。

⑵　事業の目的

地域の生涯学習センターとしての役割の遂行と同時に，現代の子育て家族が抱えている様々な問題を考慮し，地域の親子が気軽に遊びにこられるような場を提供すること，及び養成校として学生に，子育て支援を念頭においた学習の場を提供することを目的としている。

⑶　事業の概要

上述した目的で運営された「ぶんきょうワクワク広場」は，５月から翌年２月までの月に１度，土曜日，10：00～12：00まで開放した。内容及び利用者は表１のとおりである（利用者は12月時点での数）。担当は，梶浦（専任教員）が中心となり，幼稚園教諭Ⅰ種免許取得の本学事務員が，ボランティアで毎回参加した。また，本学科教員１，２名とアルバイト学生として２年生２～３名もスタッフとして参加した。場所は，本学附属幼稚園ホールで，１日の流れは，表２のとおりである。ホールに，遊びのコーナー（折り紙，お絵かき，積み木，ぬいぐるみ，運動等）を設け，実習の学生と子どもたちがかかわりながら，自由に遊んでいる。傍らで親たちはその様子をみながら，会話をしたり，子育ての情報を交換したりしている。また，10時から11時までの自由遊びの時に，２年生による絵本の読み聞かせやエプロンシアター・パネルシアター，手遊び指遊び，ピアノ演奏などの時間も設けているが，それらに興味のない子どもは，その間各自が好きなことをして遊んでいる。また，特に９月（絵本講座）と11月（食育講座）に関しては，子育てについて学ぶ講座であるので，２階の教室を使用し，関心のある親は参加し子どもはホールで託児という形式をとった。

⑷　実習の結果と考察

表１のとおり，利用者は一番多い時で全体で86名（33家族），少ない時でも34名（11家族）であった。12月までで５月から毎月８回開催し利用者延人数436名を数え，キャンパスのある南区でも毎週９ヵ所の児童会館で「子育てサロン」が開催されていることを考慮すると盛況を得ている状況である。（写真１～４参照）

１年生129名（女子100名，男子29名）が毎回15名前後ずつ実習した変化については，実習終了後課したレポートの記述を用い分析した（但し，12月時点での実習者は114名で，レポート提出者96名である）。記述内容をみると，大きく次のとおり５つの内容に分類できる。①子どもと接することの不安。②異年齢の子どもたちとの交流。③保護者との関わり。④２年生や教員からの学び。⑤その他で，具体的な記述内容については表３に示した。

今回の実習を通して「・・・まだ言葉の話せない乳児から，幼稚園に通っている幼児まで，幅広く関わることができてとても楽しかったです。」（ケース９）とか「赤ちゃんに話しかけたり，お母さんと話したりしました。お母さんからも，私にいろいろ話してくれたので，すごく嬉しかったです。」（ケース13）という記述に代表されるように，異年齢での子どもたちの集団との交流や親と関わりがもてたことの喜びや身近に親子の様子を観察することができたことなどが記述されたものも多くみられた。子どもと直接触れることで得られる喜びや満足感が記述にあらわれているものが多かった。

さらに，「２年生をみていると，とても子どもとの接し方が上手で，すごく尊敬しました。やっぱり，実習を重ねて経験を多くしている人はぜんぜん違うなと感じました。」（ケース20）とか「２年生が，ピアノを弾いたり，１枚の紙をかぶとや船や服に変身させて物語を作っていました。それをみて，子どもたちは興味津々でした。子どもたちだけでなく，私達１年生もすごさに感動し圧倒されました。１年後も私もあんな風になれるかなと思いました。そして２年生をとても尊敬しました。」（ケース22）というように先輩２年生と子どもとのかかわりや手遊び指遊びをはじめとするさまざまな実演等を身じかに見ることを通して，自分自身の現在の能力と比較して圧倒され，２年生が尊敬の対象になる。２年生という身近に目標とするモデルができ，１年後は自分もそのようになりたいという学習意欲の喚起に結びついたケースも多くあった。

また，乳幼児と接する経験の乏しさに起因して，実習自体に不安を感じてしまい，子どもとどのように接したらよいかわからず，積極的に子どもと関わることができずに終わってしまうケースも少なからずあることがわかった。（ケース１～７）１月の保育所実習前に調査した結果をみても，子どもと接する経験がほとんどない者が半数いた。さらに，実習にあたっての不安・心配事を自由記述で書いてもらったところ，子どもと接する経験が乏しい者は，子どもとどうかかわったらよいか分からないというような初歩的な記述内容が多いのに対して，経験の豊富な者は，子どもがけんかをした時どのように対応したらよいのかわからないとか実習日誌がうまく書けるかどうか心配というように，同じように子どもとの接し方に不安を感じてはいてもより踏み込んだ具体的内容が記述されているという違いが見られた。

このように，１日２時間という短時間ではあるが，学生たちは様々な体験をしいろいろな感想をもったことがわかった。学生にとって良き学びの場となったことがうかがえる。

表１　「ぶんきょうワクワク広場」の内容と利用者数　（12月18日現在）

月日（土曜）	内　　容	講　　師	利用者数	家族人数	父	母	子供（附属園児）
５／22	作ってみよう遊んでみよう，広がる折り紙の世界	梶浦真由美助教授	86	33	4	32	50(19)
６／19	思いっきり運動あそび	平岡英樹助教授	64	25	4	23	37(12)
７／10	楽しい楽器遊び	平松昌子助教授	75	27	6	26	43(15)
８／21	子どもサッカー教室	藤嶋弘岳幼稚園教諭	48	17	3	16	29(10)
９／25	ステキな絵本との出会い	ひだまり青田正徳氏	40	15	0	15	25(13)
10／16	えいごで遊ぼう	久野寛之助教授	48	17	3	17	28(18)
11／27	かんたんでおいしいおやつ作り	木藤宏子講師	34	11	3	9	22(16)
12／18	クリスマスおたのしみ会	幼児教育学科	41	13	3	13	25(19)
１／22	昔遊びをしてみよう	コスモス会					
２／19	入園・入学をひかえて	附属幼稚園園長					

表２　１日の流れ

９：15～	学生準備
９：30～	受け付け
10：00～11：00	自由遊び
11：00～12：00	毎月のテーマに沿っての活動・自由遊び
12：00～12：30	後片付け

表３　「ぶんきょうワクワク広場」参加後の感想

	子どもと接することの不安
1	・私は今まで，子ども達と触れ合う機会がなく，今回の子育て支援は少し緊張していました。
2	・短大に入ってから初めて子どもに接するので，楽しみな気持ちよりも不安で一杯でした。
3	・私は親戚の中でも一番年下だったので，今まで遊んでもらうことが多く，遊んであげるという機会がありませんでした。だから，今日は子ども達が沢山来たけれど，最初はどのように接して良いのか分からずあたふたしてしまいました。
4	・赤ちゃんはとてもかわいかったです。でも，泣いたりしてしまうと，どうして良いのか分からなくなり，パニックになってしまいました。
5	・来てくれた子ども達の中に赤ちゃんもいて，どう接したら良いか分からず避けてしまう形になってしまいました。もっと積極的に行けば良かったと思いました。
6	・１，２歳の子に接する時戸惑い，勇気を出して関わりましたが，結局泣かせてしまいました。
7	・私は小さな子ども達と一緒に遊んだ経験があまりなく，最初はどのようにすれば良いのか分からなくて，とても戸惑いました。
	異年齢集団との交流
8	・私は普段全く子どもの面倒や，お世話をしたことがないわけではないので少しは慣れています。いつもはいとこや近所の子どもで多くても２，３人の面倒を見ますが，今回は幅広い年齢であり多くの男の子や女の子がいたのでいつも面倒をみているのとは少し違いました。
9	・多くの子ども達と接することは初めての体験で，戸惑いもありましたが，まだ言葉の話せない乳児から，幼稚園に通っている幼児まで，幅広く関ることができてとても楽しかったです。

10	・いろいろな年齢の子ども達や，親との関りを実習前に見ることができて良かったです。
11	・４～５歳の子ども達は，話し掛けると言葉が返ってくるけれど，０～２歳は，ただ泣くか，じっと見つめているかで，どう接して良いのか分からず，すごく困りました。
	保護者との関わり
12	・お母さんたちと話をする機会がなかなかないので，少し緊張しましたが，これから先に役立てることができると思います。
13	・赤ちゃんに話しかけたり，お母さんと話したりしました。お母さんからも，私にいろいろ話してくれたので，すごく嬉しかったです。
14	・意外にお父さんの参加も多く，びっくりしました。子どもと遊びながらも，お父さんやお母さん方とも色々なお話ができて良かったです。
15	・保護者の方ともたくさんお話しすることが出来て，とても良い経験が出来ました。
16	・お父さんが子どもと積極的に向き合っている姿を見てとても嬉しく思いました。
17	・保護者から子どもへの言葉がけ，接し方を観察できたので勉強になりました。
	教員，先輩からの学び
18	・二年生の先輩が中心となって赤ちゃんを担当していましたが，一年学んだ知識と体験は違うな，凄いなと思いました。
19	・子どもと接するのが久しぶりだった私は，はじめはどう接してよいか分かりませんでしたが，先生や先輩などが子ども達に接している姿を見て，徐々に慣れていきました。
20	・二年生を見ていると，とても子どもとの接し方が上手で，すごく尊敬しました。やっぱり，実習を重ねて経験を多くしている人は全然違うなと私は感じました。
21	・二年生の先輩達は実習をたくさん経験しているだけあって，とても頼りになりました。子どもの興味をひくことや，声かけ，ピアノ演奏，絵本の読み聞かせなど見ていてとても勉強になりました。
22	・二年生が，ピアノを弾いたり，１枚の紙をかぶとや船や服に変身させて物語を作っていました。それを見て子ども達は興味津々でした。子ども達だけでなく，私達一年生もすごさに感動し圧倒されました。一年後私もあんな風になれるかなと思いました。そして，二年生をとても尊敬しました。
23	・先生や宮崎さんが絵本を読んだり，エプロンシアターを見せてくれた時，子ども達の質問や意見をしっかり聞き，途中でも子ども達と会話をしたり，一緒に考えたりしていました。子ども達とのやり取りがすごく上手でとても勉強になりました。
24	・年齢も様々で，沢山の子ども達と接したのが初めてで，分からないことだらけで，言葉かけが上手にできずに戸惑ってしまいました。最初はその様な状態でしたが，先輩や先生方の子ども達への接し方や言葉のかけかたなどを見て，少しずつ声をかけられるようになりました。
25	・二年生の人達はすぐに子どもに話しかけ，遊んであげていました。たった１年しか変わらないのに，自分と比較するとものすごい差だと思いしらされました。
26	・二年生の先輩が司会をしていて，子ども達との接し方が上手で尊敬しました。
	その他
27	・私の胸の中でぐっすり眠っている子どもの姿を見た時，とても優しい気持ちになることができ，保育の現場に関ることができた喜びをかみしめることが出来ました。
28	・「ぶんきょうワクワク広場」で，子ども達と触れ合ったことによって，保育士になりたいと思う願望が強くなりました。
29	・今までは，乳児はお世話がしやすく，可愛いなとしか思っていなかったけれど，初めて大変さを知り，もっと勉強や経験を重ねていかなければいけないと思いました。

「ぶんきょうワクワク広場」

写真1　「遊びのコーナー」

写真2　「折り紙コーナー」

写真3　「絵本の読み聞かせ」

写真4　「手あそび・指あそび」

Ⅳ．ま と め

児童福祉法の改正にともない,「子育て支援」が保育士の重要な役割として位置付けられ，それを遂行するための資質・能力が要求されることとなった。そこで，本学幼児教育学科では，子育て支援と公開講座を組み合わせて，毎回１年生が実習という形で参加する形式をとり，子育て支援事業を展開した。特に学生が参加することで，養成校としての子育て支援における特色を出した。そして,実習をした１年生のレポートの分析を通して，子育て支援において養成校としてどのような役割を担うことができるのか検討した。結果は次の通りである。

１．子どもと接する経験が乏しい学生にとっては，地域で子育てをしている親子に接するよい機会になった。

２．異年齢の子ども集団や親との交流をもつことができた。

３．２年生の子どもとのかかわりや実技の様子を直接観察することができ，身近に目標とするモデルができた。

少子化が進みきょうだいが少ない中で育った学生たちの中には，子どもとほとんど接することなしに入学してくる者も少なからずいる。そのような学生にとって，子どもと接する場を提供すること自体大きな意義がある。また，学生は子どもと接することを通して喜びを感じることができ，そのことは主体的に学習しようとする意欲につながるものと思われる。

このように将来保育者を目指す学生にとって，十分に子どもやその親とかかわることのできる機会や体験をもつことは重要である。しかしながら，本学で運営するには，時間的にも場所的にも様々な限界がある。そこで，地域の子育て支援センターや区が開催する「子育てサロン」などの施設や機関と連携をはかり，広くフィールドワークを行うことも大切であろう。

ところで，地域で様々な子育て支援事業が展開される中，本学の「ぶんきょうワクワク広場」の利用者が多かったのはなぜだろうか。それには，支援の対象である親子が，どのようなニーズをもって利用するのか明らかにする必要がある。今後の課題としたい。

最後に，本学幼児教育学科における子育て支援事業を実施するにあたってご協力を頂きました本学附属幼稚園園長小田進一先生・事務の宮崎里枝さんに心より感謝いたします。

注及び引用文献

1）平成13年度全国保育士養成セミナー　分科会「保育士養成における今日的課題－子育て支援等への養成校の新しい役割－」で倉敷市立短期大学　秋川陽一氏により具体的提案がなされ討議が行われた。

2）柏女霊峰，山縣文治編　『家族援助論』p65の115～26

3）札幌市子ども未来局子育て支援部　札幌子育て支援総合センター編集　『さっぽろ子育て支援推進フォーラム　2004』　2004年１月を参照した。

4）札幌市南区保健福祉サービス課　子育て支援担当で説明を受けた。

5）詳細は，藤井茂男・大滝まり子・清瀬尚子「子育て相談センターにおける保育活動による子どもの変容に関する研究－１」『北海道文教短期大学研究紀要第15号』，1995年３月，p165～184参照のこと

Abstract

The purpose of this study was to examine the role of a training school for preschool teachers in providing child care support for families. The results were as follows :

1. Students, who could hardly have experiences in contacting children, could have opportunities to contact with parents and preschool children.
2. Students could have interaction with a group of mixed-aged children and their parents.
3. Students could have a good model for learning because they could observe directly the interaction among children of their seniors.